

〈イーゼンハイム祭壇画〉《キリスト復活》におけるキリストの形態とその意義

大杉 千尋 (神戸大学)

グリュネヴァルト、本名マティス・ゴットハルト・ナイトハルト(Mathis Gothart Neitghart, genannt Grünewald、?-1528年)作〈イーゼンハイム祭壇画〉《キリスト復活》(1512-1516年、コルマール、ウンターリンデン美術館)について、新しい図像解釈を試みるのが本発表の目的である。

本作品の主題は一般に「キリスト復活」とされている。このことは、キリストの足元に見える石棺と兵士たちによって明らかである。しかし、グリュネヴァルトの時代のドイツにおいて復活のキリストが宙に浮き両手を広げ聖痕を提示する形態によって表される例は少ない。本作品の復活のキリストについて、この点が常に議論的であった。

ところで、本祭壇画についての研究には大別して二つの傾向がある。一つは主題解釈を行うもの、そしてもう一つは様式比較によってその図像源泉を探るものである。このパネルについての先行研究の多くは後者に属し、主題については厳密な検討が行われてこなかった。

更に、比較対象とされるものの多くはイタリアの作例、あるいはデューラーの版画という限られた範囲に留まり、本来この祭壇画が属する北方の図像伝統の中での考察が十分ではないように思える。例えばアイネムによる論考では、ラファエロの素描とデューラーの版画からの影響が指摘されている。また、シェーヤによれば、デューラーの版画と並んでルカ・デラ・ロツビアの諸作がその影響源として考えられるという。しかしこれらの研究においてはグリュネヴァルトがいかにしてイタリアの作品を目にしたか、復活のキリストがなぜドイツの図像伝統と異なる形態で描かれたかという点は明確に示されない。

本研究では、これらの問題点を踏まえ、キリストの手を広げ聖痕を提示する形態に着目し、その意義を明らかにすることを試みる。

オルレアンの特オドゥルフやヤコブス・デ・ウォラギネらによって、手を広げて聖痕を示す復活のキリストが「悲しみの人としてのキリスト」と関連づけられ、これが北方において大きな影響力を持ったことは既にパノフスキーやシュラーデによって指摘されており、グリュネヴァルトの復活のキリストが両手を広げて聖痕を強調する意味も、このことによって説明が可能ではないかと考えた。

更に手を広げて聖痕を見せるキリストは、*Speculum humanae salvationis*の挿絵などに見られるように代願者としての機能を有する。同様の図像が墓碑や奉納画に多く用いられていることもこのタイプのキリストが代願者の役割を期待されていたことを裏付ける。

〈イーゼンハイム祭壇画〉が置かれた施療修道院というコンテクストを考慮するなら、復活のキリストに「悲しみの人としてのキリスト」が重ね合わされ、代願者としての機能を担っていたと解釈できると考える。